

## チェンマイ大学での貢献 (69)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では筆者とパートナーであるK教授が1994年に立ち上げた3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム (Tri - University International Joint Seminar & Symposium) について記す。これまでにこの事業については何度も記したかに記憶する。本事業は創設以来2019年10月で26年周年 (The 26th anniversary) を迎えた。ここ数年この事業への参加の機会は無かった。何故かと言えばその理由はいくつかあるが、ここでは詳細は省く。K教授もかなり前から本事業への参加は控えておられ、筆者自身も久しぶりの参加である。きっかけはホスト大学である江蘇大学から招聘状が届いたからである。10月開催の事業であるにも拘わらず4月中頃に招聘状が届いた。期日が近づくまでは他の事業への参加などのスケジュールを精査して調整を為なければ成らないため、とりあえず招聘に感謝するが参加の可能性については今しばらく待つて欲しいとの返事だけ為しておいた。

10月になり、予定を調べるとタイ国のプーケット (Phuket) で国際シンポ参加の予定が入っている。しかも3大学の開催日と重複している。やむかたなく1日遅れで参加するとの返事を出し、プーケットから戻った翌日チェンマイを離れて上海に飛んだ。1日遅れの参加であるから開会式を含む集合写真撮影などの公式行事は既に済んでいた。また上海到着が夜の8時20分予定と言うこと、団体でないから同行者もおらず、筆者個人の1人旅であるため上海空港到着時の迎えを依頼しておいた。予定通り定時に到着し、一連の入国審査を終えて荷物を取り出口に出る。一般に迎えに来る側が乗客の名前を書いたプラカードを掲げて待っているのが普通であるが、筆者は自ら自分の名前を書いたプラカードを用意し迎えの人からもよく見えるように高く掲げて出口に姿を見せた。出口から15メートルほど歩くと江蘇大学3大学事業と書いたプラカードが見えた。運転手とボランティアの日本語を話す学生一人が出迎えてくれて、夕食は未だですかと聞いてくる。飛行機の中でいくらかは食べたが上海から江蘇大学のある鎮江までは車で4時間程かかるので少々食べておいた方が良く判断し、最寄りのレストランに行き麺類を注文し、早々と食べた。高速道路を移動中もサービスエリアに立ち寄りトイレで用を足すと同時にバナナなどのスナックを入手した。鎮江のホテルに到着したのは深夜の1時であった。翌朝は早く起きて予定を確認すべくホテル内をうろついているといくらかの知人に会うことができた。以後は自動的に彼らの後を追う形で事業参加となった。

招聘されたからと言って何の目的も無く、また何もしないで参加すると言うのは筆者自身望むところではない。参加するからには某かの目的と役割を持参して参加する事を旨としてこれまでも同事業に参加してきた。今回は、最近の3大学事業の状況を聞き伝える過程で、あまり積極的な事業運営への対応が成されていないかに聴いていた。そろそろ潮時かなとの判断もあって、切りの良いところで一区切りを打つ必要を感じていた。5月ころから事業創設者の一人であるK教授に最近の同事業に対する状況を話し、参加学生の励ましの意味も込めて創設者賞 (FOUNDER AWARD) の新規創設を提案した。2人の間にいくらか意見の相違はあったが最終的に筆者に一任頂く事で、キー・パーソン会議 (Key person meeting) に提案することを申し出た。その骨子は次のようなものである。筆者の本事業に対して収集した現状認識は、

- 1) 現在4つのホスト大学のうち少なくとも2校は余り事業継続に積極的でないこと
- 2) 予算獲得が問題の一つになって居ること

- 3) 何をプログラムのコンテンツにするかについても新しい提案もないこと
- 4) ホスト大学としての参加では無く単なる参加大学としての参加なら参加すると言う消極的な考えが主流のようであること
- 5) 時期的にも新しいやる気のある大学が新しいホスト大学として運営する返還期でもあること

こうした状況の中で、「ではどの様な形でこの事業に一区切りをつけるか？」と言うところが論点であった。新しく賞を設けると言っても、これまでもベストプレゼンテーション賞 (Best presentation award) などが論文発表とポスター発表に既に用意されてきたから、あまり多くの賞を用意してもどうかと言う懸念もあった。また本事業への多大なる貢献をした人物に対しその功績をたたえ、表彰すると言う意見もあったが「如何なる貢献をしたのか、どの程度多くの人がある貢献を知り評価しているか」と言う点で評価基準の明確さを欠き、ややもすれば政治的な判断で賞が授与されるという形になるのではとの懸念もあった。その結果導かれた創設賞の案の骨子は以下の様である。

- 1) やはり次世代の若者を励ますと言う観点からその賞は表彰状と記念品とする
- 2) 創設者の氏名は表彰状や記念品には一切表示しない
- 3) ホスト大学の名前とその代表者の氏名、ポスト、署名、授与年月は表彰状と記念品に記して荣誉を称える。あわせて授与年を記録及び記憶として永久に残す。
- 4) 1回のイベントでこの賞の授与対象人数は2人とし、1名当たり1万円、もしくは100米ドルの範囲で表彰状と記念品をまかなうものとする。

この内容を事前に江蘇大学に送り、キー・パーソン会議に掛けてもらうべく、依頼した。添付ファイルが開けないとの問題もあって2, 3度のファイル送付の戸惑いもあったが、タイミング的にどうにか会議での議題に含める手続きに間に合った。江蘇大学の強いリーダーシップもあり、この案件は承認され26回大会から実施された。承認の結果の具体的な対応は「論文発表、ポスター発表、学年、大学、専攻、教育研究分野を問わず優秀な成果を評価してこの賞を授与する」という理念となった。授与対象人数、金額も1回のイベントで10名、賞金は一人当たり100ドルを授与する形で実施された。当初筆者は創設者が基金を用意すると言う案であったが江蘇大学の提案は「事業創設者がそうした事をする必要は無く、ホスト大学が用意する」と言う事で締めくくられた。以後こうした形で本事業が運営されることに成る。2020年はこれまでと異なり廣西大学(Guangxi University)が新しいホスト大学となる。その後の展開は確定していないが、事業推進に消極的なこれまでのホスト大学に代わって新しい大学がホスト大学として世代交代をする雰囲気にある。筆者としては「極めてよいこと」と評価している。なぜなら事業継続に消極的である大学がホスト大学として居座ることにその意味はないからである。ホスト大学として予算確保が難しいのは事業に対する実施、継続への積極的な意欲やアイデアがないことに起因する。日頃から事業の目的、趣旨、内容を学生に説明することもなく、期日が来たからアナウンスをし、応募を掛け、期日が来たら締め切り、選考基準も示さず、あるいは優秀な応募者を意図的に選考外におき、中位の応募者から優先的に選抜するなど余りにもホスト大学として恥ずかしいプロセスを採用している例もある。それでは用意された各種の賞を授与される対象学生がゼロになるのは当然である。ホスト大学は一般の参加大学とは異なり、それなりの実績(事業創設に関わったなど)、管理運営能力、教育研究レベルに高い評価を与えているからこそホスト大学の資格にある事を自覚していない大学もある。この面からも過去26年間の本事業の継続実施は「そろそろ世代交代」の時期との認識が漂うのも致し方ないことである。筆者は本事業立ち上げ時に「できれば3, 4年毎に三重大学が率先してホスト大学として本事業を主催し、常に新しい教育・研究、国際交流事業について情報発信するべき」と考えていた。驚いたことに江蘇大学はその精神を未だに継承していて、

事業創設30周年記念事業式典の主催を考えていると聞いた。本事業のホスト大学としての実施にはほぼ1千万円以上の予算確保が必要である。金があるからやると言うのでは無く、やりたいことがあるから積極的に予算確保に動くと言うのが筋であろう。多額の予算準備が難しいからやめた方が良くと言うのでは、やる気が無いのとおなじである。日頃から積極的に事業説明をする訳でも無く、事業に全く無関心に等しい対応では事業の衰退・停止になるのは容易に予測できる。関心が無ければ新しい提案やプログラムは生まれない。以前に既述したかと記憶するが事業主催のホスト大学と一般参加大学とでは評価が大きく異なる。何が為に大学がホスト大学として関係大学の間で認可されているのかを認識して欲しいものである。筆者自身の意見を素直に言わせていただければ、国際交流事業における関係者、特にリーダー (leader) とも言われる責任者 (Person in charge) の多くは過去の事業についての文献検索 (Literature review) が不十分、で思いつきで提案する事業が多い。したがってその多くが既に他大学で実施されていたり、その新規性 (Originality, Unique idea) に欠ける点が指摘される。事業責任者に任命されたから何かを為なければと言う焦りにも似た義務感 (?) からか、情報収集・入手に謙虚でなく、自らの思いつきで私案を恥ずかしくも無く提案するから一挙に信頼度が下がる。前任者の実績をすべて消し去り、自らが全てに対応しているとの姿勢を示したいと言う意気込みが却ってマイナス効果を招いている。筆者に対しても「こんな高齢になっても未だやる気なのでは有るまいな、人間は引き際が大事だよ」と忠告してくれる人も居るが、目の前で繰り広げられる事業展開の実態に「いったい何をして居るのか?とそのレベルの低さに見て見ぬふりをせねば成らない辛さを誰が知ろうか」と言う思いも一方にはある。せめて若者を励ましたいとの意味で創設者賞 (FOUNDER AWARD) の設置を申し出た次第である。今回の本事業への主たる参加目的は事業創設者賞の提案であるが、成功裏に結果を見ることができたことは幸せである。また事業開催中に2つのセッションでチェアパーソンとしての役を仰せつけられた。折角来て頂いたのであるから、それなりに花を持たせる機会を作ると言う趣旨が働いたようである。粋な計らいでもある。また滞在中にこれまでの旧知の友に会う機会も設けて頂いた。かつてホスト役を務めた時の学長、国際交流部長、筆者が在職時の研究室への短期留学生、事業創設時の立役者的役割を果たした4代ほど前の学長など、まさに「朋あり遠方より来たる、また楽しからずや」である。南京から車を飛ばしてわざわざ筆者に会いに来てくれる。知人の一人に前学長がいるが、今は一段上の学長の地位にある。しかし何の躊躇も無く時間を取って会ってくれる。特別に夕食にも招いてくれる。まさに彼らは筆者にとって、参加学生と友に生涯の財産と言えよう。



閉会式後の受賞者表彰



参加学生によるアトラクション



参加学生によるアトラクション



全てのプログラムを終えて上海に移動